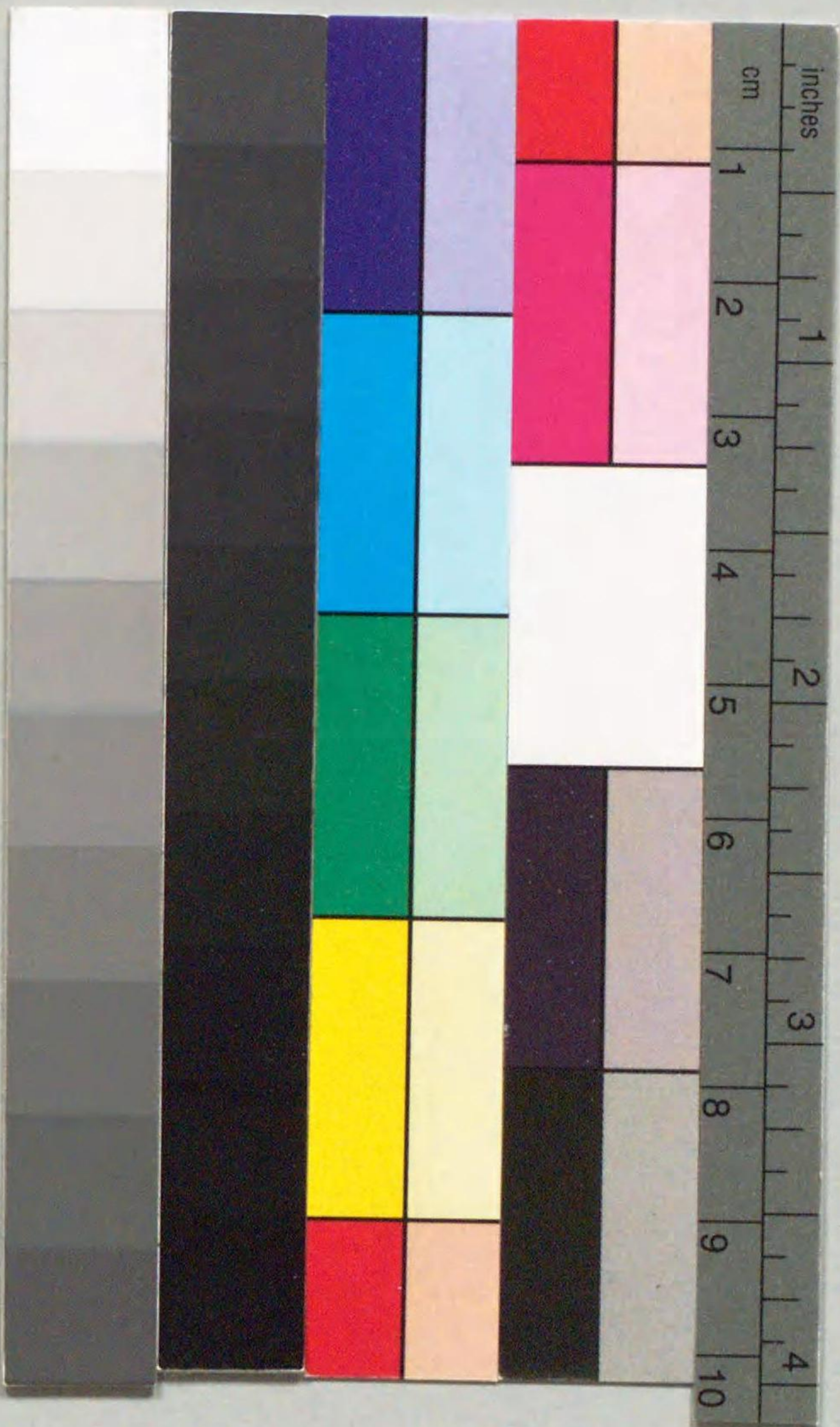


啓蒙日本外史

十七

特1  
2649







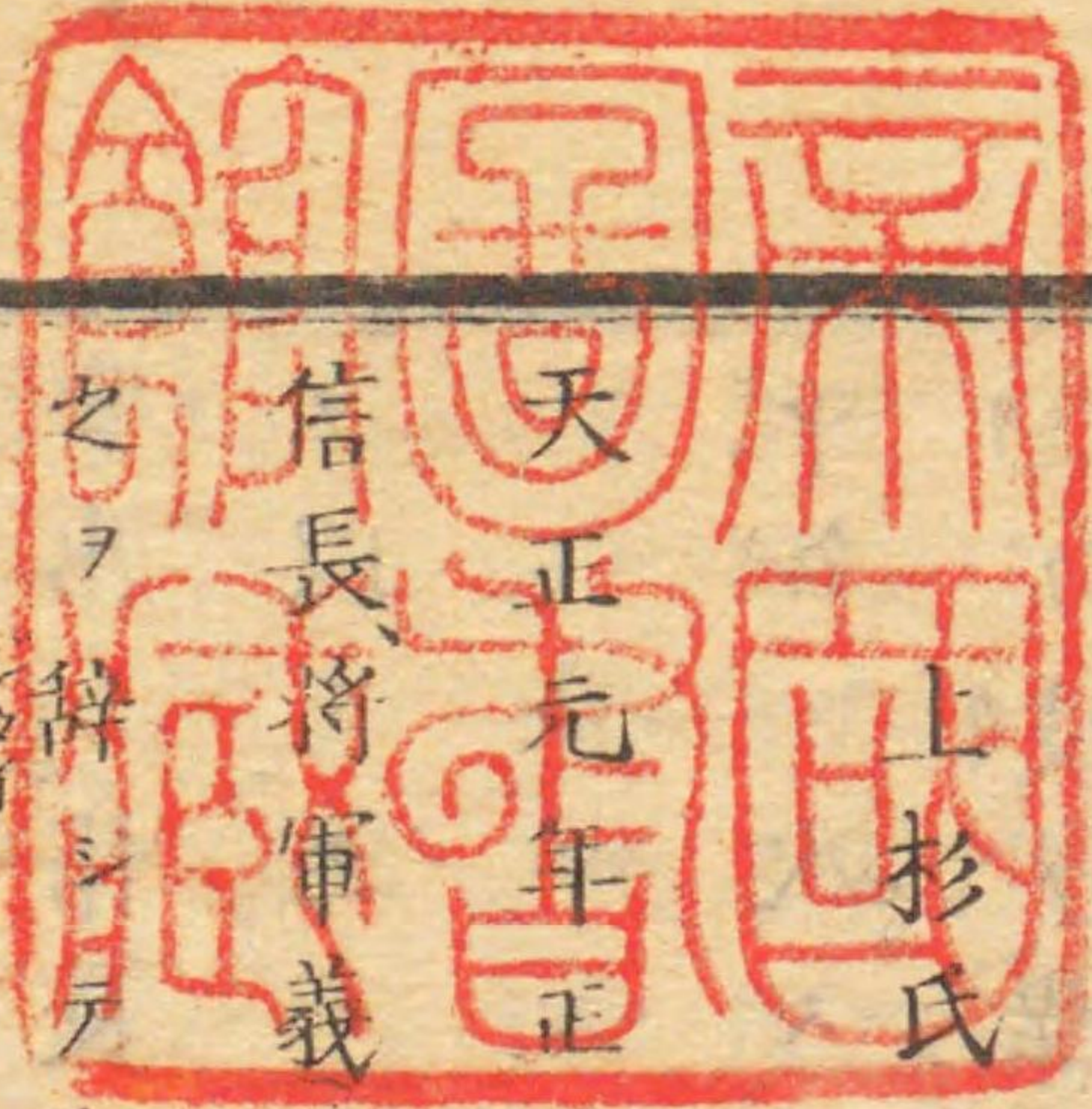
啟蒙日本外史卷之十七

足利氏後記

武田氏下

東陽大槻誠之

益軒渡邊約郎 校



天正元年正月、信玄野田城河ヲ抜キ、疾ヒ作ツテ

信長將、備義昭ニ信玄ヲ諭シテ兵ヲ弭ルヲ請フ、信玄

之ヲ辭シテ、信長ノ五罪ヲ訴フ、二月、秋山晴近ヲシテ

岩村城濃ヲ誘ナヒ降リシム、城將ノ妻ハ信長ノ姑ナ

リ、晴近奪ツテ之ヲ納ル、妻ト為京畿ノ將士来ツテ欵





實情ヲ送ル者多シ、三月、信玄疾レ愈テ復々發ス、曰ク  
此行必ズ京師ニ入リト、三月、兵三萬ヲ部シテ美濃  
ニ出ヅ、信長萬人ヲ以テ出デ、拒グ、山縣昌景八百騎  
ヲ以テ之ニ馳ス、馳レ衡ッ信長戰ハズシテ走ル、和ヲ乞  
フ、益マスカム、信玄聽サズシテ、轉ジテ三河ニ入リ  
平谷ニ次ス、四月、疾レ復々依ル、自カラ起ル、病レ愈  
リヲ度テ、諸將ヲ召シテ後事ヲ處ス、勝頼ニ衆ヲ攝シ  
テ代リ治リ以テ信勝ノ長ズルヲ嫉タシム、之ヲ誡テ曰  
ク、汝慎ンデ兵ヲ佳ンテ以テ我が國ヲ込ボヌ勿レ、吾  
死セバ天下獨リ一ノ謙信有ルノミ、汝援ケテ請ヒ國

特 281

ヲ以テ之謙信ヲニ託セヨ、彼レ一タビ女ノ託ヲ受ケ  
バ、必ラズ鄰國ト合シ以テ汝ヲ侵サバル也ト、言畢ツ  
テ昏迷ス、恍惚トシテ人事已ニシテ山縣昌景ヲ呼シ  
テ曰ク、明日汝ノ旗ヲ瀨田ニ樹テヨト、是昏迷シテ守  
ト、而シテ三月、兵ヲ起ス時、曰ク此行必ラズ京師ニ入ル  
故ニ昏迷然リ、乃チ卒ス、年五十三ナリ、諸將遺命ヲ以  
テ喪ヲ秘ス、信玄ノ弟信綱ノ貌、信玄ニ肖タレテ以テ  
輿ニ之ヲ載セテ歸ル、曰ク信玄疾アリテ國ニ歸ルト、  
昏夜ヲ以ツテ四方ノ使者ヲ延見ス、信玄又豫シメ空  
頭華押信玄死後ヲ計ツテ兼テ遺紙數百紙ヲ具シテ、

文景日入水...



以テ書問ニ備フ、故フ以テ来タリ犯入者ナシ、信玄居  
 常畧ボ書志ニ涉ル、嘗テ孫子ノ語第七ヲ以テ其旗  
 書シテ曰ク、動カザル山ノ如ク、鎮定シテ疾リニ動侵  
 掠スル火ノ如ク、敵境ヲ侵掠スル猛火ノ原其静トル  
 林ノ如ク、敵未ダ乗ズル林ノ如シキ其疾キト風人如  
 シト、敵正ニ乗ズル風ノ如シハ馬場信房問テ曰ク、風疾ト  
 ト雖トモ倏チ起リ倏チ止ム者ニ非ザラハカト、言フ  
 疾ト雖トモ倏チ起リ倏チ止ム、信玄曰ク、兵鋒ハ疾キヲ  
 人意ノ難トクナラザルナリ、信玄曰ク、兵勢則チ吾  
 貴ブノミ、苟シクモ止メバ、苟モ止ムトハ、兵勢則チ吾  
 レ麾下ヲ以テ之ニ継グト、信房曰ク、君、第二合ノ勝ヲ

要スル也ト、其君臣ノ武事ヲ講究スルコト、皆此ノ類ナ  
 リ、甲鄰頗ブル信玄ノ死ヲ聞キ、北條氏政使ヲ馳テ之  
 ヲ謙信ニ告グ、謙信方ニ食ス箸ヲ舍テ、歎ジテ曰ク、  
 吾レ好敵手ヲ失ヘリ、世復々此ノ英雄男子アララフ  
 ト、因テ潜然ト涕ヲ流ス者之ヲ久クハ甲斐ノ宿將馬  
 場信房、山縣昌景、内藤昌豊、高坂昌宣ノ四人交シテ勝  
 頼ニ説テ、和ヲ謙信ニ請ハシム、勝頼聽カズ、勝頼性剛  
 復ニシテ自カラ用テ、強情ニシテ人ノ言長坂調閑跡  
 部勝資、信玄ノ時ヨリ已デニ近幸セラレ、勝頼益マス  
 之ヲ寵ス、勝頼兵ヲ美濃ニ出サセ、ト欲ス、四將交ゴモ

文章日本外史 卷之十七 三



不可言、調閑勝資之ヲ勸メテ出カシム、長篠河ヲ圍ム會ワテ乃チ止ム、五月、勝頼信房ヲ遣ハシ長篠ヲ援ク、敵ハシヲ設ケテ紫ヲ燻キ、營ヲ燒テ遁ル、ハ偽シテ以テ我ヲ誘ナフ、將士之ヲ追ハシト欲ス、信房曰ク其烟白シ營ヲ燒クニ非ザル也、騎ヲシテ往テ之ヲ賤シム、其所ニ到テ伏リ、有衆シテ伏アリ、乃チ退テ黒瀬遠ニ次ス、城長篠城陥リ、歸ル、昌景ノ濱松遠ニ向クモ亦利ケラズ、テ歸ル、二年二月、勝頼美濃ニ出テ、將士ヲ宴ス、昌宣、昌豐、相謂ツテ曰ク、武田氏ノ滅ブル此宴ニ兆スト、昌宣説テ曰ク、君勝ニ伍フ

テ戦メズ、怨マテ四鄰ニ構ス、長久ノ計ニ非ズ、宜シク地ヲ二氏德川氏ニ返シ、之ト連和シ、稍ヤシ東國ヲ取テ厚ク其勢ヲ集スベシト、二嬖調閑勝資沮ンデ止ム、已ニシテ二嬖、勝頼ニ勸メテ遠江ニ出テ、天龍河ヲ濟ソテ敵ニ遇フ、戦ハズシテ返ル、返ツテ伊奈濃信ニ至ル、信虎コトニ在リ、年已デ八十ナリ、乃チ載テ歸ラシト欲ス、其狂暴ヲ視ル故ノ如シ、乃チ止ム、四鄰、甲斐ノ人、競ハザル振ハザラ、觀テ、信玄定メテ死スルヲ知ル、稍ヤク之ヲ窺フ、信玄ノ死スルヨリヤ、信長意ヲ謙信ニ專ラニス、辞ヲ解クシ、禮ヲ厚クシテ、之ニ事フル



猶ホ信玄ニ事フルガ如シ其妹ヲ以テ神保長純ニ嫁  
 ス長純ハ上杉義春ノ兄謙信ニ属スル者信長因ツテ  
 陽ハニ謙信ニ結ニテ陰カニ之ヲ圖ルナリ又陰カニ  
 計ヲ以テ上杉氏ノ諸城ヲ招キ欸ヲ已ニ歸ラシム謙  
 信書ニテ其反覆ハシバヲ誦ム信長答書シテ陳疏ス陳説ス  
 謙信聴サズ畠山義隆ノ將游佐彈正等義隆ヲ毒  
 弑シ七尾城ヲ以テ信長ニ降ルニ會フ七月謙信兵  
 三萬ヲ將ヒテ西伐ス長純ヲ水船城中ニ攻テ之ヲ拔  
 ク遂ニ加賀ニ入リ金澤ヲ屠フル兵ヲ移シテ七尾ヲ  
 攻ム義春ヲ以テ將ト為シ努力シテ復々能登ヲ取ル

游佐等援ヲ信長ニ乞フ信長方ニ長島ヲ攻ム來ル能  
 ハズ來テ游佐ヲ援九月城陷イル游佐等ヲ誅ス乃チ  
 兵ヲ休スルコトニ日十三夕ニ属ス月色明朗ナリ謙信  
 酒ヲ軍中ニ置キ諸將士ヲ會ス酒酣ニシテ自カラ詩  
 ヲ作シテ曰ク霜軍營ニ滿テ秋氣清シ數行ノ過雁月  
 三更越山光セ得タリ能州ノ景遮莫ルサモラ家郷ニ遠征  
 ヲ憶オモフト言フハ既ニ越後能州ノ地ヲ并有シ類フハ  
 見テ開婦ノ吾ガ遠征ヲ思ナリ將士ノ歌詩ヲ善スル者ヲ  
 シテ皆之ヲ和セシム遂ニ政ヲ國中ニ為シテ歸ル信  
 長大兵ヲ遣ハシ來リ援ク城陷イルヲ聞テ引キ去ル



文書日大... 五



信長猶ホ使ヲミテ罪ヲ謙信ニ謝セシム是歲信長ニ  
 河ノ將與平信昌ヲ招キ降シテ長篠ヲ守ラシメ、以テ  
 甲斐ニ備フ、三年四月參河ノ計吏大賀某オホハガ、陰カ  
 一欸クワンヲ甲斐ニ送リ、内應ヲ為スヲ約ス、勝頼往イテ掬  
 城ニ陣ス、大賀謀ゴト覺ハリ誅セラレ、ト聞キ、乃チ  
 返ル、五月、勝頼萬人ヲ以テ昌宜ニ附シ、留マツテ越後  
 ヲ拒ガシメ自カラ一萬五千ヲ以テ長篠ヲ圍ミ、道虛  
 寺ニ軍ス、叔父ノ信實ヲシテ、鷲巢墨河ヲ守ラシム、德  
 川氏援ニ信長ニ乞フ、信長敢テ出デズ、使者三反スレ  
 此許サズ、使者請フテ曰ク、援クザレバ則チ遠江ヲ武

田氏ニ納レテ之ガ為ニ先驅シテ以テ尾張ヲ取ラン、  
 且ツ信玄已デニ死ス、公何ゾ怖ル、ノ甚シキヤト、信  
 長乃チ自カラ將トシテ来リ接ク、兵九ソ七萬猶甲斐  
 ノ騎兵ノ衝突スルヲ憚ル、柵ヲ植ツルヲ三層守ルニ  
 萬銃ヲ以テス、勝頼戰ハント欲ス、信房馬場美濃守、昌景山縣  
 三郎昌豐内藤修等皆諫ムテ曰ク、敵衆新タニ來ル、其  
 氣銳ナリ、且ツ之ヲ避クルニ若カズ、不セザレバ則チ  
 疾ク城ヲ攻メヨ、我ガ兵ヲ損スト雖モ、猶ホ抜イテ歸  
 ル可キナリト、二筈曰ク一戰シテ兩敵織田氏ヲ夷ラ  
 グルハ、今日ニ在リ、老怯ノ計ゴトヲ聽ク勿レト、信房



曰ク、今日ノ戦ハ老怯ナル者ハ必ズ死セシ、公等ノ若  
 キハ乃チ遁走スルソシ、勝頼遂ニ室賀行俊、小山田  
 昌行ヲ留メテ城ヲ圍マシメ、自セラ進シテ河ナ豊河ヲ  
 濟ツテ陣ス、且日敵間道ヨリ鷲巢ヲ襲フ信實敗死ス  
 我ガ陣顧ミテ動ク、動リ敵衆戦ヒヲ挑ム、昌景左ノ先  
 鋒為リ進シテ敵ノ柵ヲ犯ス、丸ニ中ツテ死ス信房右  
 ノ先鋒為リ、真田則幸、土屋直村ト、柵ヲ破ツテ進ム、則  
 幸直村モ亦丸ニ中ツテ死ス信長萬銳ヲ以テ守ル、其  
 丸ニ中ル者多キ組ナリ  
 室賀行俊來タリ請テ曰ク、圍ミ解ク可キヤ否ヤト勝  
 頼曰ク可ナリト、言ト未ダ畢ラザルニ、諸軍大ニ潰シ

信房人ヲシテ馳テ勝頼ニ白サシメテ曰ク、君速カニ  
 去レ、臣請フ留マツテ之ニ死ヒシト、八十騎ト止マリ  
 戦ヒ、盡トク其騎ヲ凶ナフ、自カラ高邱ニ登リ、顧ミテ  
 勝頼ヲ視ル、已ニ遠ザケリ乃チ敵ニ號シテ曰ク、我ハ  
 馬場美濃ナリ宜シク斬テ以テ重賞ヲ受ケヨト、敵之  
 ヲ叢刺シテ死ス、二鬣先ヅ遁ル、昌宜豫ビメ軍敗ヲ慮  
 ルマ、兵八千ヲ以テ境上ニ迎テ、以テ帰ル、勝頼ヲ率ヒ  
 因ツテ大ニ諫メ、北條氏ト婚シ、以テ二氏ヲ拒ガント  
 請フ、勝頼之ニ從ヒ、信長既ニ大ニ捷ツ謂フ甲斐ハ患  
 フルニ足ラズ、患フル所ハ獨リ謙信ノミト、乃チ大ニ



安土ニ城テコレニ移リ、以テ北道ニ備フ柴田勝家其  
 最モ驍將タリ、因テ越前ヲ守リ、北莊ニ居ル、八月謙信  
 兵ヲ將ヒテ加賀ニ入り、松任城ヲ攻ム、城將蕪水高秀  
 援ヲ信長ニ乞フ信長五萬人ヲ將ヒテ來テ御幸塚ニ  
 陣ス、勝家先鋒タリ、謙信疾ク攻テ城ヲ拔ク、高秀ヲ斬  
 テ其首ヲ齎ラシ、信長ニ贈テ曰ク、頃ハ水城ヲ攻ム、相  
 公遠ク來テ援ラル幸甚ナリ、然レモ城將已デニ首ヲ  
 授ク、謹レデ此ニ奉贈ス、公當ニ一戰以テ之ヲ吊フ有  
 ルベシ、明早將ニ相見ントスト、信長許諾シテ夜ニ乘  
 ジテ軍ヲ退ク、八伏ヲ設ケ以テ蹙ツ、諸將追撃セ

請フ、謙信曰ク信長豈徒ク帰ル者ナラニヤト亦引テ  
 還ル是歳勝頼使ヲシテ和ヲ謙信ニ請ハシメ、織田氏  
 ニ報ゼント欲ス、謙信之ヲ許ス、其質子ヲ徵ム、肯セズ、  
 會タマ德川氏ニ股ノ攻ム、城將依田幸成固ク守テ下  
 ラズ、乃チ諏訪原江遠ヲ攻メ、陷イル、遂ニ小山原、  
 武田氏ノヲ攻ム、勝頼曰ク、彼レ我が復々出テ能  
 ハザルト謂フカト、乃チ兵二萬ヲ募リテ之ヲ撈ク敵  
 圍ミヲ解テ去ル、十二月幸成死ス、德川氏復々來タリ  
 攻ム、幸成ノ子信蕃之ヲ拒グ、勝頼命ジテ城ヲ弃テ退  
 カシム、岩村山城、晴近又陷イル、信長手ヅカラ其姑ヲ及

文蒙日本外史 卷之卅七 八



秋山晴近ノ妻ハ 是月勝頼北條氏ノ女ヲ迎ヘ 婚  
 信長ノ姑ナリ  
 成ス昌宜退テ人ニ謂ツテ曰ク 今夕吾レ始テ枕ヲ  
 高ノスル 睡ルヲ安ジテ得ルト 四年春勝頼兵ヲ遠江  
 ニ出シテ 徳川氏ト横須賀遠ニ相持テ 勝頼戦ハント  
 欲ス昌宜諫メテ曰ク 長筱河ノ役ニ多ク老将ヲ失フ  
 獨リ臣ノ存スル有ルノミ 今又之ヲ殺サント欲スル  
 カト 戦フ可ラバレテ戦ヘバ敗スル 勝頼乃チ退キ相  
 良遠ニ城イテ帰ル 越後ノ將士謙信ニ説テ曰ク 甲斐  
 ノ兵新タニ敗ル 乘ズ可キノリト 謙信曰ク 我レ信玄  
 ト數十戦シテ取ル能ハズ 其死スルニ及ニテ 弱子頼勝

下ニ對ヘレ 三月 謙信越中ニ入ル 蓮沼ヲ取リ 椎名泰  
 種ヲ獲テ之ヲ殺ス 別將ヲシテ飛彈ニ入ラシメテ 江  
 馬氏常陸介ヲ夷ラダ 遂ニ自カラ加賀ニ入ツテ 小松  
 ヲ攻ム 織田氏ノ將前田利家等来タリ 援ク 先鋒ヲ以  
 テ撃ツテ之ヲ破ル 川田長親ヲシテ越中ノ守リ 柿崎  
 景家ニ能登ヲ守ラシメテ 還ル 信長謙信ノ西向スル  
 ヲ患テ 日夜之ヲ禦グ 所以ノ謀ル 柿崎景家人ヲ遣シ  
 テ馬ヲ上國ニ市ル 信長喜ンデ 曰ク 以テ間ス可キト  
 リト 間ハ 離間ノリ 景家主従乃チ直ヲ給スルコト倍

可成



シ自カラ書シテ謝ス、伴ハリ馬ヲ高價ニ買更ニ雀鷹ヲ索ハ、景家其直ヲ貪ツテ數シバ鷹ヲ給ス、景家信長リト後チ其款ヲ通ズト告ルアツテ終ニ殺サル、景家ヲ遇信長陰カニ能登ノ人長重連加賀ノ人松竹彦紹ヲ招キ一向ノ賊ヲ誘フテ北向セシム、五年重連兵ヲ聚メテ宍水城登ニ據ル、小松安宅、大道山ノ諸城並ビニ起ツテ之ニ應ズ、是時ニ當ツテ筒井順慶、松永久秀等大和ニ據リ、遙カニ款ヲ謙信ニ送り其而上ヲ請フ、又西毛利氏ニ約シテ、東西ヨリ信長ヲ夾リ、攻ム、九月、謙信自カラ將トシテ宍水ヲ攻メテ之ヲ拔ク、重連ヲ

斬リ遂ニ小松、安宅ヲ攻ム、信長、柴田勝家、前田利家等ノ五將ヲ遣ハシ、兵四萬八千ヲ將ヒテ來タリ、援ケンム、而シテ紀レヒ亦潛カニ來テ之ヲ助ク、謙信攻メハ三城、宍水、小松ヲ拔ク、進ンデ石動橋中ニ至ル、織田氏ノ軍ヲ距ル、十里ニシテ陣ス、使ヲシテ明曉ニ會戦ヲ約セシム、信長復タ夜ニ乘ジテ逃ル、謙信大ニ笑ラテ曰ク、信長奔ルニ巧ナル者ナリト、其ヲシテ猶ホ在ラシメバ、當ニ盡トク之ヲ水ニ踢ニ墜ルマキ、ミテ、速ニ進ンデ金澤ヲ攻メテ之ヲ陷イル、越前ニ入り行ユク織田氏ノ壘ヲ攻ム、盡トク其守兵ヲ驅リ焚掠シ



テ進ム、烟塵天ヲ蔽ス、信長退テ北莊ヲ保以遂ニ退テ  
 長濱ニ入ル、謙信天寒ク雪下ランコトヲ以テ、又久秀等  
 己デニ敗死スルヲ聞キ、軍ヲ班サント欲ス、乃チ書ヲ  
 信長ニ遺ツテ曰ク、信玄既ニ死ス、公則チ四郎ヲ家康  
 ニ委ネテ、四郎ハ勝頼ナリ、勝頼ノ武、信玄ニ如カ、自カ  
 ラ安土ニ居ルハ、盖シ謙信ニ備フルナリ、公數シハ畿  
 内ノ敵ト樂戦ス、未タ此人ノ技倆ヲ觀ザルノ  
 請フ明春三月十五日ヲ期ス、聊カ八州中、加賀能登飛  
 彈、信濃、上野、卒ヲ舉ゲテ西ヒシテ公ト相見シ、公謙  
 佐波ナリ、野ノ卒ヲ舉ゲテ西ヒシテ公ト相見シ、公謙  
 信ヲ視ルコト皮履ノ都人士ト同シ、フスル勿レト、時ニ

京師ノ人喜ンデ皮履ヲ穿ツ、故ニ云フ、使ノシテ書ヲ  
 齎ラサシム、因ツテ越後布二千端ヲ贈ル、信長、使者ヲ  
 延見シ言テ曰ク、吾ガ為メニ返テ越後公ニ報セヨ、信  
 長何ゾ敢テ公ト角セハヌ、公來ラバ將ニ盡トク刀劍  
 ヲ脱シテ、獨リ扇ヲ腰ニ挿サシ、單騎迎ヘ、謁シ、先導シ  
 テ以テ都ニ入ラントス、公ハ義人ナリ、信長辛苦シテ  
 經營スル所ハ必ズ奪ハレザルナリト、使者復命ス、謙  
 信哂ツテ曰ク、信長英雄ナリ、甘言以テ我ヲ怠ラス、  
 ミト、聞ク長筱ノ役、信長三層ノ柵ヲ立ニ、渠レ柵ト銃  
 トヲ以テ、甲斐ノ四郎ヲ困シムト、明年復々必ラズ此

又... 十一



ヲ以テ我ヲ擬<sup>シテ</sup>ス、信長ハ心長後ノ戰略ヲ以テ、我レ豈其  
 計ニ墮<sup>オナ</sup>ンヤト、十月越後ニ歸ル、<sup>アヲオヨボス</sup>間日ルヲ隔<sup>カキ</sup>テ傳ヘ  
 大ニ管内八國ノ兵ヲ発セシム、期スルニ三月五日ヲ  
 以テス、加賀以西ノ兵浴道ニ附キ從テ、京畿大ニ震<sup>フル</sup>フ、  
 信長使ヲシテ之ヲ勝頼ニ告ゲシメ、前故<sup>ゼンコ</sup>前年長篠ノ  
 ヲ捐<sup>ス</sup>テ、奮好ヲ修メント請フ、曰ク謙信西上ス我レ  
 家康ト之ヲ北道ニ拒グ、願クハ公直チニ越後ヲ指セ  
 ヲ、謙信西上スル後チ、其事克々バ、則チ其地ハ唯公  
 取ル所ト、勝頼答セズ、<sup>ル</sup>許諾ナリトシ、六年三月、北陸諸國ノ  
 兵撤ニ應ジテ雲ノ如ク集ル、謙信自カラ臨<sup>カン</sup>ンデ簡閱<sup>カンエツ</sup>

ス車馬ヲ觀約束、號令ヲ申ス、將ニ發セントス、發スル  
 ニ先ダツト二日ニ疾ヒ作ル、二日ニシテ遂ニ卒ス、年  
 四十九、卒、信玄ニ後ル、五年ナリ、直江兼續、本莊繁  
 長等ノ諸大臣、相共ニ謀ツテ曰ク、三郎ハ北條氏康ノ  
 向<sup>ナ</sup>ルニ上杉氏ニ質ト上杉氏ノ胤ニ非ズ、胤ハ乃チ景勝  
 ノ長姉<sup>ト</sup>娶<sup>メ</sup>ツテ景勝ノ政景、輝虎トリ、且ツ親姪ナリ、且シ  
 ク立ツベシト、三郎ヲ立ツレバ北條氏必ズ因テ以テ  
 北陸ヲ并吞ス、吾輩ミナ之ガ臣僕ト為ラント、是ニ於  
 テ上杉義春ヲ遣ハシ、命ヲ矯<sup>イカ</sup>リ、矯命ト稱ス、信急ニ景勝  
 ヲ上田ニ迎テ来ツテ内城ニ入り、親信ヲ分ツテ諸門

又蒙甲本外史 卷之十七 十二



ヲ守ラシム、景虎、外城ニ在ッテ日夜相ヒ闘ヒ、闘ヒナリ、  
 弓銃交ゴモ發ス、織田氏ノ細作ニテ敵ノ情狀ヲ窺ヒ知ル、  
 後ニ在ル者、走リ歸テ信長ニ告ク、信長大ニ喜ビテ掌ヲ、  
 撫シテ曰ク、天下大ニ定マルト、乃チ佐々間信盛ヲ加テ、  
 賀ニ入り、前田利家ヲ鉢登ニ入り、佐々成政ヲ越中ニ  
 入り、各ノ自カラ之ヲ畧取セシム、景勝、景虎、兵結ンデ  
 解ケズ、故ヲ以テ拒グ能ハズ、景虎終ニ敗走シテ上杉  
 憲政ニ北川ニ歸ス、戸定ノ城主北莊丹後變ヲ聞テ馳  
 セ至ル、景勝ニ説テ曰ク、兩郎君宜シク各ノ四州ヲ領  
 シテ、共ニ信長ヲ拒グベシ、不セザレバ則チ彼レニ、

乘シテ來タリ、侵サシ、先公百戰シテ取ル所ノ者、一旦  
 一之ヲ敵人ニ附ス、豈惜ム可ラサラヤト、景勝聽カ  
 ズ、北莊怒ル、夫ッテ景虎ヲ助テ數シハ景勝ノ兵ヲ破  
 ル、因ッテ善光寺ニ軍ス、景勝ノ母上田ニ在リ、肩輿  
 來ッテ城ニ入り、諸將士ヲ召シテ面シ、之ヲ勗シ、謙信  
 ノ遺業ヲ保タシム、將士感激シテ力守ス、七年正月、景  
 勝夜ル兵ヲ潛メテ景虎ノ軍後ヲ襲ヒ、大ニ之ヲ破ル、  
 北莊脫走ス、景勝ノ將萩田主馬之ヲ識ル追ッテ之ヲ  
 刺ス、是ニ於テ諸城多ク景勝ニ歸ス、景虎走ッテ殿尾  
 越ヲ保ツ、北條氏政之ヲ聞キ、兵萬餘ヲ遣ハシテ景虎



ヲ援シ、又援ヲ武田氏ニ請フ、勝頼出デ、飯山信ニ軍  
ス、景勝與テ戰テ利アラズ、齋藤朝信、景勝ニ説テ、東上  
野ヲ以テ勝頼ニ啗シ、先ヅ金萬兩ヲ以テ又厚ク其二  
嬖ニ賂フ、二嬖交ゴモ勝頼ニ説テ曰ク、景虎ハ君ノ舅  
ナリ、景虎ハ勝頼ノ妻ノ兄然リ、雖モ之ヲ援ケテ克  
テバ、則チ北條氏東北ヲ連属シテ、將リニ君ニ及バン  
トス、是レ東上野金萬兩ヲ得ルト孰トカ利ナリト、勝  
頼乃チ景勝ノ兵ヲ合セテ景虎ヲ攻ム、景虎憲政ト皆  
自殺ス、相摸ノ兵引テ去ル、氏政大ニ怒ツテ勝頼ト絶  
ニ織田氏、徳川氏ト約シ、勝頼ヲ夾リニ攻ム、七月、勝頼

何不成等

其妹ヲ以テ景勝ニ妻ス、貝津ノ成信玄兵ヲ置  
テ撤テ、沼津ニ移ス、數シバ兵ヲ上野及ビ駿河ニ出  
ス、時ニ高坂昌宣既ニ死シテ復々諫ムル者莫シ、而シ  
テ二嬖益ヤス、横ナリ、徳川氏ノ世子信康岡崎ニ居リ、  
其母関口氏罪アツテ廢居ス、甲斐ノ監人減慶ト通シ、  
減慶ヲシテ來ツテ款ヲ送ラシメ、内應ヲ為スコト約ス、  
勝頼之ヲ許ス、事覺ハレ母子皆殺サル、九月、勝頼沼津  
ニ次ス、氏政兵四萬ヲ以テ三島ニ軍ス、十月、徳川氏險  
ヲ踰ヘテ駿河ニ入ル、火ヲ由井ニ縱ツ、勝頼別將ヲシ  
テ氏政ニ當ラシメテ西ス、勝頼自カラ二嬖故サラニ



其行又遲遅ク、遲遅ク發發至至レバ則則チ去去ル、德川氏徳川氏已已テ去去ハ  
 年六月、德川氏高天神ヲ攻ム、十月、城且且ニ陥陥イラント  
 又、城將岡部興行岡部興行援援ケテ勝頼ニ請請フ、裨將横田尹松横田尹松言  
 ハシメテ援兵ヲ請フ使者曰ク、城深ク敵地ニ在リ、君  
 宜宜シク來ルベカラズ、臣等分ツテ當當ニ城ヲ守ツテ死  
 スベシ、即チ免ルヲ得得ズ走リ歸スルモ亦難カラザル  
 ナリト、將士皆其言ヲ贊贊ス、勝頼曰ク坐坐シテ援援ズンバ  
 以ツテ口ヲ藉ルナシト、危危キヲ援援ルノ義ヲ藉リテ、以  
 乃チ出デ、上野ヲ徇徇ハ、膳城膳城ヲ攻メ、肉薄肉薄シテ用用ヒ  
 乃云乃云シテ之ヲ拔ク、九年二月、氏政ト伊豆ニ相持相持ス、氏

政ノ將松田憲秀松田憲秀欵欵ヲ勝頼ニ送ル、勝頼戰ハレテ欲ス、  
 二發二發之ヲ止ム、三月、高天神高天神陥陥イル、興行獲ラル、伊松伊松力  
 戰シ脱脱シテ歸ル、勝頼之ヲ賞ヒント欲ス、曰ク脱脱シ歸  
 テ賞セラル、君一在テハ僭僭ニ非ズ、賞ト為シ、臣一在ツテ  
 冒冒賞賞ルナリト為スト、固辞シテ受ケズ、勝頼疆土疆土日ニ  
 削削ラル、二發其和ヲ信長ニ請フヲ勸ム、小山田昌辰小山田昌辰曰  
 ク晚晚ニ、和和ヲ講スル今其侮侮ノ長ズルノミト、聽カズ、織  
 田氏ノ質子質子信長信長ノ季季ヲ返シテ和ヲ請フ、信長答書辭答書辭  
 甚ハダ倨倨ル、穴山信良穴山信良又勝頼ニ説テ曰ク、先公ノ威威四  
 鄰ニ震震フ、故ニ居ル所城池ヲ設ケズ、然レ氏氏康康信長



君蒙日本外史 卷之十一 伊木成書

好ミヲ謙信ニ通スルヲ聞ケバ、測チ岩殿甲久能河吾

妻上野ノ三城ヲ築イテ以テ之ニ備ム、謙信從約相約

ヲ從スルヲ屑イキシトセズ、故ヲ以テ事無キノミ、今鄰國復

々謙信ニ如ク者ナシ、安ニゾ備ヘネガル可ケニヤト、勝

頼之ヲ然リトス、乃チ薤崎ニラガキニ城ヅク、號シテ新府ト曰

フ、信良、勝頼ノ女ヲ娶イツテ婦ト為シト欲ス、武田信豊

ニ嬖ニ賂ス、信豊、賄賂ヲ以テ勝頼ト乃チ信豊ニ適トダ、信

良之ヲ御シテ信良頼ハナリ終ニ款ヲ織田氏ニ通ズ、

諸公族、諸將セ亦款ヲ送クル者多シ、木曾義昌ハ義高

子、義仲十四勝頼ノ妹イ婿イナリ、其誅求義昌セハ諸將ノ貳アル者一黨與

スルカト誅ニ苦シミ、陰カニ信長ニ降ダル、其兵ヲ導

カント信長ノ兵ヲ導クナリ、故請フ、來ッテ之ヲ告ダル者アリ、

二嬖イ作ケテ告ル者イ虚言ト為ス、已ニシテ事覺

ハル、十年正月、勝頼、義昌ヲ討シト欲ス、内部忠高曰ク、

其地險狭ナリ、輒カスク往ク可カラズ、臣請フ先ヅ往キ、

説テ其計ゴトノ紓ヒテ、義昌ノ守計ヲ急君兵消ヤク

其後ニ從フ可ナリト、二嬖之ヲ沮ム、遂ニ信豊ニ命ジ

テ五千人ヲ將ヒ、雪ヲ留シテ赴ムキ討タシム、義昌ニ

鳥居嶺濃ニ遇フ、大ニ敗レテ歸ル、二月、勝頼兵二萬ヲ

將ヒテ出デ、諏訪濃ニ陣シ、諸將ヲ遣ハシ要害ヲ分

敵蒙日本外史 卷之十一 十六



守セシム、而ルニ信長已デニ長子ノ信忠ヲ遣ハシ、兵  
十餘萬ヲ引テ木曾ヨリ入ル、瀧川一益、川尻鎮吉等前  
部タリ、徳川氏、北條氏、各々大舉シテ之ニ應ズ、下條信  
氏、瀧澤濃信ヲ弃テ、走ル、小笠原信嶺、松尾濃信ヲ以テ降  
ダル、信忠入ツテ桔梗原トキヨウカニ至ル、勝頼諸將ヲ誣訪ニ  
召シ聚議スレバ決セズ、城昌茂進ミ請フテ曰ク、方今  
ノ勢ヒ一日モ猶豫ス可カラズ、臣尹松ト五千ノ兵ヲ  
假ルヲ得テ先鋒ヲ為シ、昌幸、昌辰山田、真田小等、餘兵ヲ以  
テ繼イテ進ミ、敵復々柵ヲ設クル、長篠ノ役ノ如クナ  
ラズンバ、我レ必ズ之ニ克タレント、勝頼之ヲ二變ニ問

ス、二變曰ク少年ノ者ノ言フ所用ニ可カラザル也ト、  
阿部忠高曰ク、臣間ヲ遣シテ敵ヲ覘フニ、敵深ク客地  
ニ入り離レハ心ヲ離ルカシマ、整ハズ、襲フ可キナリ、我レ夜ル  
兵ヲ合シ疾ク進ミ、其前部ヲ挫イテ以ツテ其膽ヲ破  
ラント、二變許サズ、已ニシテ信長叛テ徳川氏ニ降タ  
ル、駿河ノ諸城ミナ解テ走ル、獨リ田中駿河ノ守將依田  
信蕃シゲ下ラズ、是ヨリ先キ、徳川氏數シバ信蕃ヲ攻メテ  
志ヲ得ズ、捷戰ヲ得ガ是ニ至ツテ人ヲシテ説テ之ヲ  
降サシム、對テ曰ク、吾城ヲ守ルヲ知ルノミ、外事ヲ知  
ラズト、乃チ信長ヲシテ書ヲ以テ之ヲ諭サシム、三月、



信蕃出デ、甲斐ニ歸ル、徳川氏招クニ、厚祿ヲ以テス、  
辞シテ曰ク、吾レ國難ニ赴キ、未ダ家ヲ謀ルキ暇アラ  
ズト、諏訪ノ軍潰ユ、在ル者僅カニ二千、勝頼乃チ走ツ  
テ新府ニ歸ル、信忠、兵ヲ合ヒテ、高遠タカトホヲ圍ム、城將仁  
科信盛、小山田昌辰ト固ク守ル、信忠辨士ヲシテ入ツ  
テ説カシメテ曰ク、孤城大敵ニ抗ス、糶粉カシメスル待ベシ、  
苟クモ出テ、降ラバ以テ將下為シ、其邑ヲ増サント、  
昌辰曰ク、吾レ先公ニ報ズルハ正ニ今日ニ在リ、若シ  
何レ為ル者ゾ、敢テ米ツテ我ヲ誘イガナフヤト、使者ヲ執  
ツテ其耳鼻ヲ截リ、之ヲ放還ス、信忠怒リ、信嶺ヲ以ツ

伊木成金

テ導ト為シテ疾ク攻ム、昌辰力戦ス、數シバ出デ、信  
忠ヲ狙撃ス、克ズシテ城遂ニ陥イル、信盛時ニ歳及ビ

渡邊某ネヒウツ夫金吾大ト皆之ニ死ス、是ニ於テ敵兵四面ヨ

リ來リ薄ル、而シテ新府ノ城壁未ダ全カラズ、勝頼從

ツテ之ヲ避ケレト欲ス、嫡子信勝慷慨コウカイシテ曰ク、事已

テニ此ニ至ル、何クニ之テ免レニヤト、當ニ旗ト無ム楯

源氏傳家ノトノ焚テ徐カニ自裁スベキノミト、勝頼

未ダ答ハズ、小山田義國誘フテ勝頼ノ執ヘテ、以テ織

田氏ニ市レト欲スルヤ、説テ曰ク、臣ノ邑岩殿イハノ甲險ニ

ニテ保ツベシト、真田昌幸曰ク、臣ガ邑吾妻野ノ險ニ



新編 日本外史 卷之十一 伊予守 伊予守 伊予守

ニシテ積粟アルニ岩カズ、請フ死ヲ以テ若ヲ奉ビ  
十、勝頼乃チ昌幸ヲシテ先ツ歸ラシム、二嬖曰ク昌幸  
ハ新ナリ、義國ハ故ナリ、新ハ新參、故ハ故參、故ヲ去テ、新  
ニ就ク奈何レト、勝頼遂ニ岩殿ニ從フ義國ヲシテ先  
ツ歸テ已レヲ待タシム、是ニ於テ諸叛臣水曾義昌ノ  
質、三百人ヲ焚殺シ、節ニ死スル者ノ質十人ヲ召シテ、  
金ヲ頒テ與フル、各ノ百兩之ヲ散遣ス、其重器ヲ収メ、  
殘兵三百ヲ以テ岩殿ニ赴ク、二府ヲ顧望シ、君臣相ヒ  
顧ミテ泣下ス、カシヲ拍尾甲ニ至テ義國ノ來リ迎フルヲ待  
ツ、七日ニシテ至ラズ、走ツテ駒飼ノ民家ニ入ル、即夜

義國人ヲシテ襲フテ、其質ヲ取ラシメテ、乃チ閉ラ絶  
テ勝頼ヲ拒ダ、勝頼出ヅル所ヲ知ラズ、進退ヲ謂フニ谷  
乃チ走ツテ天目山斐甲ニ入ル、兵塵カニ四十人、土屋昌  
恒、秋山光次、其馬ヲ牽ク、阿部忠高、温井常陸、鎗ヲ擔フ  
テ之ニ從フ、カシヲ小宮山友信、單騎來タリ從フ、友信初メ數  
シハ勝頼ヲ諫メ、二嬖ヲ除カント請フ、又小山田將監  
ナル者ト、事ヲ争ソヒ並ビニ訴フ、將監厚ク二嬖ニ結  
テ、勝頼遂ニ友信ヲ發鋼ス、ハイツコ其仕進ノ路、友信是ニ於テ  
難ニ赴キ、田野ニ追及シ、昌恒ニ就キ言テ曰ク、君嘗テ  
我ヲ擯ゾク、言フハ君ノ明ヲ以テ、我ヲ目ハイツコ而シテ我レ

新編 日本外史 卷之十一 伊予守 伊予守 伊予守 十九



君難ニ赴クハ、是レ君ノ明ヲ傷フナリ、言フハ我レ君  
則チ不忠ニ非ス、是然レ臣赴カザレバ我ガ義ヲ缺ク、  
我ガ義ヲ缺クヨリヤ、寧ロ君明ヲ傷フノミ、寧ク君ヲ  
スレ、赴キ援テ忠義ヲ為、因テ問フ、調閑何クニ在リヤト  
スニ如カザルヲ言フ、曰ク昨逃ルト、勝資ヲ問フ、曰ク亦逃ルト、將監ヲ問フ、  
曰ク逃ル、ト已デ二十日ナリ、友信曰ク唉吾レ今日  
アルヲ知ル久シト、勝頼俛首スルノミ、已ニシテ山僧  
村民ト謀リ、敵ヲ導テ勝頼ヲ索ム、勝頼乃チ其配ノ北  
條氏ヲシテ相摸ニ奔ラシム、對テ曰ク妾何ノ顔アツ  
テ阿見政ヲ見レヤト、又信勝ヲシテ間道ヨリ陸奥ニ

轉ラシム、信勝曰ク、大人宜シク奔ルベキノミ、兎冢嗣  
ヲ辱カシム、義當ニ此ニ死スベシト、勝頼曰ク、然ラバ  
則チ吾レ女ト共ニ死ナレト、顧フニ女チ未ダ撰甲禮  
ヲ行ハズ、當ニ禮ヲ行テ死スベシト、乃チ秋山光次ニ  
請テ實ト為シ、信勝ニ被ラスニ無措ヲ以テス、禮畢心  
此ニ敵兵奄チ至ル、衆飢ヘテ起ツ能ハズ、勝頼白布ヲ  
以テ髮ヲ約シ、刀ヲ拔テ親カラ戦フ、信勝鎗ヲ以テ  
昌恒弓ヲ以テ之ヲ翼ク、敵ヲ卻ルヲ三次、山縣氏卒ハ  
過某シ、衛兵叛入ヲ聚メテ後山ヨリ瞰射ス、我ガ兵ニ  
十斃ル、昌恒矢盡キ且ニ刀ヲ拔カレトス、敵鎗ヲ叢メ

收蒙曰本外史 卷之十七 二十



テ之ヲ擬ス、勝頼走ツテ昌恒ヲ救フ、敵ノ為メニ喚及  
 之腋ヲ刺レテ死ス、年三十七、信勝モ亦死ス、年十六、昌  
 恒、友信、光次等、ミナ之ニ死ス、武田氏滅ビ、織田氏  
 甲斐ニ入ツテ令テ懸テ曰ク、氏族ノ將士出デ、降ル  
 者ハ邑ニ復スト、勝頼ノ祖叔父信就、信光、叔父ノ信綱、  
 信龍、弟ノ信貞、從弟ノ信豐、及ビ二壁オホダケ、長阪調開、義國等  
 相率ヒテ出デ、降ル、ミナ誅セララル、ト為ス、獨リ穴  
 山、信良、甲斐ノ一郡ヲ領スルヲ得ル、向ニ信良、勝頼ノ  
 怨恨ニシテ、欸ヲ織田氏ニ通上野ノ諸將武田氏ノ世臣  
 故ニ獨リ所領ヲ得ル、非ザル者ハ、盡ク瀧川一益ニ隸ス、信濃ノ諸將ハ森

長可ニ隸ス、柴田勝家等ト拵角ヲ相為シテ、其後ヲ繼  
 日、其前フ、結グ角ト曰フ、一以テ上杉氏ヲ圖ル時  
 益、長可、勝家ト、協カスルヲ謂フ、北陸訛言アリ、信長ノ兵大ニ甲斐ニ敗スト、上寇群  
 起ス、景勝兵ヲ遣シテ之土寇ヲ助ク、勝家等ト越中  
 戦カフ、勝家越後ノ兵ヲ憚レ、拒グニ、慙サレ、以テス、  
 其他ノ諸將ハ景勝ヲ侮リ、柵外ニ出デ、戦フ、輒ス、  
 撃破セラル、瀧川一益之ヲ聞キ、兵ヲ遣ハシテ越後  
 ニ入ラン、五月、景勝、一益ノ兵ヲ三國嶺ニ迎、撃ツ  
 テ、大ニ之ヲ破リ、自カラ將トシテ越中ニ入ル、魚津ヲ  
 拔キ、轉ジテ信濃ニ入ル、森長可ト戦フ、勝家等復タ魚



津ヲ取ル五月、穴山信良、徳川氏ト俱ニ京師ニ入ル、六月、信長、其將明智光秀ニ弒セラル、ト為ス、信良走リ、歸テ、途ニ盗ニ遇テ殺サル、一益、長可、勝家、變ヲ聞キ、ミナ西ニ走ル、而シテ武田氏ノ故地大ニ乱ル、諏訪頼忠、小笠原貞慶、村上國清、ミナ兵ヲ舉テ先業ヲ復セシト欲ス、景勝自カラ兵七千ヲ採ヒテ之ヲ助ク、七月、景勝、貝津濃ニ入ル、北條氏、徳川氏、各々數萬人ヲ以テ来リ争フ、真田昌幸、高坂源吾、初メ景勝ニ属ス、已ニシテ北條氏ニ通ズ、曰ク臣内應ヲ為ス、景勝獲ベシト、景勝之ヲ覺トリ、執テ源吾ヲ誅ス、北條氏知ラス、昌幸

コ以テ前導ト為シ、筑摩川ヲ濟リ以テ源吾ノ報ヲ待ツ、景勝源吾ノ首ヲ送テ戦ヒテ請フ、北條氏懼レテ引キ去ル、已ニシテ徳川氏盡トク、甲斐信濃ヲ取ル、景勝河中ノ四郡ヲ定メテ歸ル、景勝幼ヨリ武幹アリ、心謙信ノ恩ニ長尾政景叛ク、謙信之ヲ攻殺ヲ報ジテ以テ政景ノ罪ヲ償ハシテ誓フ、謙信嘗ツテ深澤九鬼ナル者ヲ誅セントス、景勝時ニ年十四ニシテ、手ツカラ二人ヲ斬ル、謙信、政景ノ舊邑ヲ賞賜ス、數シバ軍ニ從ツテ功アリ、謙信卒シテ三年、景虎ニ克テ、將士盡トク伏ス、獨リ柴田因幡ナル者、新発田ニ據ツテ



石田三成 卷之十七 何不成舎

下ラズ、景勝常ニ内顧スル所アリ、國內ニ虞リ故ノ以テ專ハラ外事ヲ営ム能ハズ、織田氏ノ將筑前守豊臣秀吉、明智光秀ヲ誅シテ京畿ヲ畧定シ、柴田勝家ト戦フ、勝ツテ之ヲ殺シ加賀能登ヲ取ル、十二年使ヲ遣ハシ来ツテ好ミヲ通ズ、曰ク吾レ佐々成政ヲ攻ムテ以テ越中ヲ取ラント欲ス、願クハ子救フ勿レト、景勝曰ク吾レ素ヨリ成政ト仇ス、而シテ越中ハ本ト吾ガ地ナリ、吾レ先ヅ之ヲ取ラント欲スルノミト、乃チ自カラ兵ヲ將ヒテ越中ニ入ル、十月、宮崎城ヲ攻メ、一鼓シテ之ヲ拔ク、使者ニ謂ツテ曰ク、越後ノ男子武ヲ用ユ

ル此ノ如シ、返テ筑前守ニ語ゲヨ、吾レ越中ニ放ケル取ラント欲スレバ即チ取ル、而シテ取ラザル者ハ以テ子ニ譲ルナリト、景勝盡トク越中ヲ取ラズ、十三年四月、秀吉攻メテ成政ヲ降シテ越中ヲ取ル、五月、秀吉獨リ石田三成等三十人ヲ率ヒ来ツテ越後ニ入ル、猶ラ使者ト稱シテ薄水城ニ至ツテ、城將須賀ヲ見ル、告ルニ實ヲ以テス、景勝ニ面見シテ事ヲ計ラント欲ス、須賀兵ヲ以テ之ヲ守リ、馳ヒテ景勝ニ告ダ、執一テ吉ヲ執リ之ヲ殺サントヲ請フ、景勝許サズシテ曰ク、彼ニ身天下ノ權ヲ司ドル、而シテ嶮ヲ踰ヘテ敵國一入

石田三成 卷之十七 何不成舎 二十三



ル者ハ蓋シ前約前日通好ヲ時ム吾レ必ズ言ハ食マ  
ザルヲ以テナリ、景勝ノ前言ニ違ハザルヲ知テ之ヲ殺  
スハ不義ト、即日直江兼續等六十餘人ト秀吉ヲ見ル  
秀吉人ヲ屏ヅゲ與テ語ル、獨リ兼續三成ト侍スルヲ  
得ル、己ニ別テ去ル、七月、上田ノ城主真田昌幸、徳  
川氏ニ畔イテ復々景勝ニ属ス、貨ヲ送ツテ援ヲ乞フ  
徳川氏来リ攻ム、日景勝、須田某シ、相摸本莊某、越前  
ヲ援ヲ乞フナリ、日景勝、須田某シ、相摸本莊某、越前  
等ヲ遣ハシ、信濃ノ兵六千ヲ將ヒテ赴キ援ク、兵利少  
ナシ、景勝大舉シテ之ニ繼ヒテ欲ス、徳川氏ノ兵引キ  
去ル、十二月、秀吉又使ヲシテ厚ク越後ノ君臣ニ贈ラ

シム、景勝主従ニ贈、其入朝ヲ促ガス、十四年五月景勝  
入朝ス、秀吉路次ニ供帳ス、景勝過ル所ノ坊舎ニ帳幕  
スルヲ為メニ奏シテ正四位上ニ叙シ、参議ニ任ズ、七  
月國ニ帰ル、是歲新発田ヲ陥イリ、盡トク越後ヲ定ム  
十五年佐渡莊内羽ノ莊内出ヲ定ム、十七年景勝又京  
師ニ入ル、従三位ニ進ミ、中納言ニ遷ル、直江兼續四位  
侍従ト為ル、藤田守能登泉澤守河内安田守筑前ノ三臣皆四  
位ニ叙ス、兼續父ノ實綱ヨリ常ニ謀議ニ参ス、仇人ニ  
刺死セラルルト為ス、實綱刺死子ナシ、謙信近士ノ搦  
口與六ニ命ジテ嗣ト為ス、是レヲ兼續ト為人、文武ノ

改蒙印本外史 卷之十七 二十四 阿不城論



村能多シ、景勝ニ事ヘテ尤モ寵任セラルル十八年、秀吉、東北條氏ヲ伐ツ、景勝、前田利家下、東山道ヨリ進ミ、數千城ヲ下ダス、北條氏滅ビテ、又利家ト陸奥出羽ヲ徇、其人民曰フ、撫循文禄元年、秀吉ニ從ツテ朝鮮ヲ伐ツ、テ那古耶前ニ陣ス、二年、景勝兵ヲ將ヒテ朝鮮ニ入ル、釜山城ヲ築イテ歸ル、是時上杉氏領スル所歲入三百萬石可リ、秀吉心景勝ノ能ヲ畏惡ス、又謙信久シク其國ニ訊ヘ國人ミナ景勝ヲ戴クヲ度ル、其封ヲ徙サン、ト欲ス、嘗テ從容トシテ之ニ問テ曰ク、卿ノ國歲入幾何、ト、景勝削テラル、ヲ恐ヒテ實ヲ以テ對ヘズ、曰ク

七八十萬石ノミト、秀吉佯ハリ驚テ曰ク、何ゾ少キヤト、因ツテ之ヲ會津ニ徙ス、百二十萬石ヲ食ス、兼續ニ賜フニ米澤ノ地三十萬石ヲ以テス、越後ヲ堀秀治ニ賜フ、景勝大ニ之ヲ悔ユ、實ヲ以テ答ヘ、是歲慶長二年、リリ三年、秀吉疾アリ、嗣子秀頼猶ホ幼ナシ、乃チ景勝ト德川前田、毛利、浮田氏トテ以テ、並ビニ五大老ト稱ス、與ニ盟約、輔佐ヲ為サシメテ幼主ノヲ為ス、秀吉薨シ、德川公ノ威權獨リ熾シ、四年、石田三成、直江兼續守、ト謀リ、景勝ヲ勸メテ兵ヲ擧ゲトス、曰ク、群牧共ニ公ヲ推スヲ願フト、諸將ハ載書誓約ナリヲ為ツテ之ヲ



示ス、因テ密カニ議ヲ定ム、七月、佐竹義宣ト皆國ニ就  
ク、香指原ニ城イテ墨寨ヲ修ム、糧餉ノ峙ミ、陸奥出羽  
土兵ヲ誘フテ齊シク起ラシム、又人ヲシテ越後ノ  
遺民以テ遺民ト曰フヲ招カシム、遺民競ヒ起ツテ之  
ニ應ズ、堀氏治制スル能ハズ、五年正月、藤田信吉景勝  
ヲシテ正ヲ大坂ニ賀セシム、徳川公厚ク之ニ賜テ、信  
吉歸ツテ驟シバ景勝ヲ諫ム、兼續之ヲ殺カシテ欲ス、  
二月、信吉家ヲ挈ケテ奔リテ徳川氏ニ歸ル、徳川氏伊  
奈圖書ヲシテ來テ景勝ニ諭シテ西上セシム、景勝聽  
カズシテ、徳川氏盟ニ背クキ罪ヲ數テ、徳川公終ニ意

ヲ決シテ東伐ス、前田、佐竹、伊達、最上氏出羽ヲシテ、四  
面ヨリ來タリ撃タシム、伊達氏左京大夫會津ノ東境ニ國  
ス、衆ニ先ツテ至ル、其將伊達成實、片倉景綱、兵ノ將ヒ  
テ來タリ侵ス、景勝兵ヲ遣ハシ撃テ之ヲ卻ゾク、七月、  
徳川公將帥百餘人ヲ統ベテ小山ニ至ル、景勝長治陸奥  
ニ軍ス、兵ヲ分チ險ヲ守ツテ以テ之ヲ待ツ、石田三成  
乃チ秀頼ノ命ヲ矯リ、毛利、浮田、島津、小西ノ諸將ト俱  
ニ兵ヲ舉ゲテ美濃ニ至ル、八月、徳川公庶長子秀康ヲ  
シテ萬人ヲ以テ宇都宮ヲ守ラシメテ自カラ兵ヲ引  
テ西上ス、直江兼續、兵ヲ悉シテ之ヲ颯セツ登ルナリ、先登



ヲ伐ノッスルヲ請入、景勝聽カズ、秀康来ッテ戦ヒ、請  
フニ會フ、景勝答テ曰ク、先人信謙軍ヲ用ユルニ未ダ嘗  
テ人ノ危ニ乗ゼス、吾レ敢テ違ハザルナリ、且ッ公ハ  
年少ナリ、我が敵ニ非ズ、吾レ内府家ノ返ルヲ待ツテ  
戦ヲ決スルノミ、糧<sup>レ</sup>伏<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>シ<sup>レ</sup>、<sup>ケツ</sup>乏<sup>ボク</sup>アラバ當ニ相ヒ給<sup>ス</sup>  
ベシト、乃チ收<sup>ル</sup>テ會津ニ歸ル、徳川公ノ西スルヤ、諸  
將ニ命ジテ曰ク、景勝ハ勁敵ナリ、慎シテ與ニ鋒ヲ争  
フ勿レト、是ヲ以テ四鄰環守<sup>ル</sup>、會津ヲ速ッテシテ敢テ  
来リ犯サズ、九月、景勝兵四萬ヲ以テ兼續ニ附シ、最上  
義光ヲ山形ニ攻セシム、義光二十五砦ヲ設テ之ヲ待

ツ、援ケテ伊達政宗ニ請フ、政宗兵二萬ヲ発シテ之ニ  
赴ク、兼續二十一砦ヲ拔キ進シテ長谷城ヲ攻ム、櫓  
ヲ起テ地道ヲ鑿<sup>ツ</sup>、晝夜攻メ撃ツ、城將志村高治善ク  
拒ダ、景勝又中村式部ヲ遣ハシ、上山城<sup>出</sup>ヲ攻メシム、  
判<sup>ラ</sup>ラス、義光、政宗、兵ヲ合シテ来リ援メ、兼續ノ軍中  
傳呼アリ曰ク、上國ノ軍敗スト、已ニシテ使者會津ヨ  
リ至ッテ三成ノ敗聞ヲ傳フ、命シテ軍ヲ班<sup>カ</sup>ス、兼續  
曰ク、變ヲ聞テ退クハ怯<sup>ト</sup>リト、乃チ人ヲシテ城ニ入  
テ故ヲ告ゲシメ、死<sup>ヲ</sup>告<sup>グ</sup>謂<sup>フ</sup>テ物故ト曰フ、三成ノ敗死  
日衆ヲ鼓<sup>シ</sup>テ齊<sup>シ</sup>ク登リ、其外城ヲ陷<sup>イ</sup>テ返ル、義



光政宗高治ト之ヲ尾撃ス、兼續返リ戦フコト、二十餘  
 次ニシテ米澤ニ至ル、政宗進ンデ福島奥陸ヲ攻ム、本莊  
 繁長、城ヲ守リ撃ツテ之ヲ却ヅク、六年二月、政宗又来  
 リ侵ス、繁長又撃ツテ之ヲ却ヅク、政宗轉ジテ逢隈河  
 ヲ濟テ梁川奥陸ヲ攻ム、城將須田大炊オホイ四伏ヲ設ケテ與  
 ニ戦ツテ之ヲ破ル、四月、政宗兵ヲ留ム、須田ニ備ヘテ  
 返ツテ本莊ヲ攻ム、本莊出デ、松川奥陸距ガ、敵ヲ侮  
 ヲテ備ヘズ、政宗曉カキニ兼ジテ濟リ、撃ツテ之ヲ敗ル、本  
 莊走テ福島ニ入ル、須田之ヲ聞キ、逢隈川ヲ濟ツテ其  
 兵ヲ破ル、遂ニ政宗ノ軍後ヲ襲ヒ、水莊ト夾カミ撃ツ

テ之ヲ走ラス、景勝乃チ自カフ將トシテ出ツ、政宗驚  
 キ其軍ヲ舍テ、獨リ十餘騎ト間道ヨリ白石奥陸ニ走  
 ル、徳川公既ニ石田氏ニ克キ天下之ニ帰ス、景勝秀康  
 ニ因ツテ罪ヲ謝ス、徳川公人ヲシテ来ツテ其西上ヲ  
 促ガス、景勝即チ行ヲ治ム、行装ヲ為シ、將士皆危カシメテ之  
 ヲ止ム、景勝曰ク、吾レ豈再々ム負ク可クニヤト、七月  
 伏水ニ至ツテ謁見ス、八月、國除セラル、獨リ米澤三十  
 萬石ヲ食ム、兼續ノ罪ヲ宥シテ五萬石ヲ賜フ、慶長十  
 九年十一月、大坂兵起ル、徳川公諸將ヲ率ヒテ之ヲ攻  
 ム、景勝、佐竹義宣ト先鋒ヲ為ス、二十四日、大坂ニ至ル

後醍醐天皇 卷之十七 石不台舎藏 二十八



景勝ノ將杉原常陸、水干衣ヲ鎧表ニ尚ク衆指シテ之ヲ異トス、曰ク彼ルハ越後ノ宿將ナリ、是レ其軍禮カト、杉原聞キ笑ツテ曰ク、吾カ鎧太ダ敵惡ナリ故ニ此ヲ尚フルノミナリ、景勝鷓野陣ス、義宣會福鷓野、津ニ陣ス、間日並ビ進ンテ敵ノ柵ヲ破ル、景勝命ジテ柵ヲ植テ、塹ヲ大和河、津南ニ設ク、隊將鐵某シ、衛門ヲシテ銃手五百ヲ將ヒテ之ヲ守ラシム、將士竊カ言フテ曰ク、此レ戰場ニ非ズ、知ラズ何ク用ゾ、日午城兵大ニ出ヅ、義宣ノ兵利アラヌ、銃手齊シク糞ス、敵兵乃チ卻ヅク、已ニシテ城兵七隊鷓野ニ出ヅ、我が先鋒須

田大炊與ニ戦ツテ敗走ス、杉原常陸、安田上総、長尾權四郎ト、進ミ撃ツテ其三將ヲ斬ル、徳川公、鷓野戦ヒ急ナルヲ聞キ、堀尾氏丹羽氏ヲシテ、来ツテ景勝ニ代ラシム、景勝槍手三百ヲ以テ、自カラ環ツテ陣ヲ為シ、倚ニ憑ツテ動カズ、使者十餘輩来ツテ教旨ヲ傳フ、徳川氏トテ堀、丹羽、二皆入ルヲ得ズ、景勝声ヲ厲マシテ曰ク、吾レ戰場ニ在リ、教命アリト雖モ、一步モ退ク能ハズ、ト、兵ヲ麾イテ益マシテ進ム、遂ニ城兵ヲ破ル、城兵柵ニ入ル、景勝ノ銃手又柵内ノ兵ヲ驅ツテ城ニ入ラシム、復々出デシメズ、須田敗レテ愧テ、五騎ト馳セテ敵中



ニ入り人ゴトニ一首級ヲ得テ返ル、徳川公ノ軍監小  
栗又壹状ヲ賜ヘテ以テ聞ス、川氏ニ上聞ス退テ同僚  
ニ語テ曰ク、今日ノ戦既ニ解ク、猶水宜シク進撃ス  
ベキノ機アリ、吾レ之進撃ノ機ヲ言ヘ、景勝辞スル  
ニ日暮ヲ以テス、憾ム可シト、徳川公之ヲ聞キ叱シテ  
曰ク、景勝ノ武事若ガ曹敢テ之ヲ誹議スルヲ得ンヤ  
ト、次曰諸營ヲ巡視シテ上杉氏ニ至ル、親カラ之ヲ慰  
勞ス、遂ニ功状ヲ杉原長尾安田須田鐵島津等ニ賜ス  
徳川氏諸將ノ功ヲ 杉原代謝シテ曰ク、臣等何ノ力カ  
之有ラン、先寡君謙ノ家範猶ホ存ス、臣等奉ジテ以テ

コレヲ周旋スルノミト、退テ人ニ謂ツテ曰ク、吾レ  
先公ニ從ッテ數シバ武田氏ト戦フ、今日ノ戦ト若  
キハ乃チ兎戯ノミ、何ゾ功状ヲ載リ事ナスルニ足ラン  
ヤ、上元和元年五月雨々大坂ヲ攻ム、景勝特命景勝先役  
ノ功勞ヲ以テテ京師ヲ留守シ、八幡ニ陣ス、凡ソ  
兩役ニ用ル所ノ軍監ハ兵事ヲ練スル者ヲ選ム、命ヲ  
諸營ニ傳フルニ甲斐ノ舊臣多シ、兵事ヲ練ル者、冬ク  
而シテ真田昌幸子ノ幸村、城中ニ在リ、戦守戦事ト最  
モ觀ルベシ、世以テ武田氏ノ遺法ニ出ヅルト為ス、  
リ九年三月、景勝病ニテ卒ス、年六十九ナリ、子ノ定勝



孫ノ綱勝、相繼ツギイテ官秩ヲ襲フ、綱勝コウ大シ外甥ノ吉良キチラ義英ヒサノ子綱憲ヲ以テ嗣ト為ス、十五萬石ヲ削ラハル上杉義春ハ本ト畠山氏ナリ、謙信ノ為ニ子トシ養ハル、後ヲ以テ上條ノ城主ト為リ、故上杉定實ノ後ヲ承グ、景勝ヲ佐ケ景虎ヲ撃テ最モ功アリ、徳川公命ジテ畠山氏ヲ復セシム、弘治十年具教亡ブ、是ニ髮ヲ削リ入庵ト號シ、京市ニ老フ、大坂ノ冬ノ役ニ之ヲ一條城ニ召シテ、上杉氏行軍ノ法ヲ問フ、諸侯伯皆ナコレニ侍ス、諸將義春ト義春ノ人為ル短小ニシテ善ク辨ズ、已レ嘗テ謙信ニ從ツテ聞見スル所ヲ陳ズ、音辭流ル、

ガ如シシ公善ト稱ス、諸將ミナ織田豊臣、以來兵ニ老ユル軍中ニ老ノ豪傑ナレ、臣敢テ聲ヲ出ダス者ナシ、後チ眼ヲ病ンデモウ目ス、人ヲシテ近代ノ史乘ヲ讀マシメテ之ヲ聽ク、武田上杉氏ノ事ニ至レバ、往々其謬偽ヲ指サスト云フ、宇佐美定行ノ孤定興、數シバカニ軍ニ從フ、功ヲ立テ、自カラ贖ハン父定行ノト欲ス、景勝其父ノ故誘ナヒ、漏船ニ載セ、同ジク溺レテ死ス、景勝ハ政景ヲ以テ許サバ、ルナリ、諸國ニ流寓シテ、関原ノ事作ルニ及ズ、難ニ會津ニ赴ク、封ヲ從スニ及ンデ、景勝、邑ヲ削ラレ、終ニ越後ニ隱レテ身ヲ終フ、其子勝米澤ニ從ル時



興紀伊ニ仕フ、亦越後ノ事跡ニ於ケル綜覈ハ總リ、  
 嚴ハ驗ナリ、事ヲ考ヘスル所アリ、初メ武田上杉ノ二  
 家並ビニ耕戰ヲ務メテ、名法ヲ以テ國ヲ治メ、政ゴト  
 嚴刺ヲ貴ブ、而シテ上杉氏事ヲ作ス、率ムネ信義ニ仗  
 ル、是レ其獨リ存シテ今ニ至ル所以ナリ、然レ七世ノ  
 兵法ヲ言フ者、二家ヲ並ビ稱スト云フ  
 外史氏ガ曰ク、世ニ二家ノ兵書ヲ傳フ、後人ノ假託言  
 ハ後人ニ家ノ名ニ出ヅル者アリ、盡ク信ズ可ラズ、  
 假託シテ著作スニ出ヅル者アリ、盡ク信ズ可ラズ、  
 特ニ兵ヲ我が邦ニ言フテ、二公ニ期スル者ハ、兵ヲ論  
 則ト為ス、其由ヲ知ラバンバアル可カラザルナリ、夫

レ勇悍カンナクヒク捷也、性ハ健カナルニシテ、耻ヲ重ンジ死ヲ  
 輕ンズルハ、我が國俗ノ自カラ有スル所也、我が先王  
 又之ヲ養フニ恩ヲ以テシ、之ヲ結ブニ信ヲ以テス、之  
 ヲ撫マシ摩マシ鍊レン治チスルヲ數百十年ヲ經テ、闔國ノ民其上ニ  
 親シミ其長ニ死シ、手足ノ頭目ヲ扞ルガ如ク、以テ能  
 ク四鄰ヲ震シ懾シシ、魏唐ノ強大ト雖モ加フル能ハザル  
 侮慢スル能ハ所以ノ者ハ、此俗重悍カンナクヒク捷ニシテ、耻ヲ  
 ノ風又恃チテナリ、唐氏ニ通ズルニ至ルニ及ンデ、乃チ  
 此ヲ舍テ、彼レヲ學ブ、撲ボクヲ劉リ文ト為シ、撲ボクハ質ナ  
 革メ文飾ヲ強ク、鑠タツテ弱ト為ス、平時ハ奔ハシ競ケシテ急ア  
 為スヲ謂フ強ク、鑠タツテ弱ト為ス、平時ハ奔ハシ競ケシテ急ア



レバ遁逃<sup>シタリ</sup>ス、朝ヲ舉テ皆婦人ニ幾シ、而シテ先王ノ遺  
 民勇ニシテ死ヲ輕ンズル者ハ、皆將門<sup>ヲケ</sup>ニ取<sup>トク</sup>ラハト  
 為ス、此レ勇ニシテ死ヲ厭<sup>ハズ</sup>フ以テ王權ヲ奪ヒ、利ヲ  
 營<sup>テ</sup>ハ、為ス所ニシテ成ラザルナシ、承久建武ノ事<sup>承久三年</sup>  
 北條義時、後醍醐帝ヲ隱岐ニ移ス、建武元年、足利尊氏  
 鎌倉ニ據テ反ス、朝廷新田義貞ヲ遣ハシ、之ヲ討ズ、克  
 タク輒ハチ皆然リト為ス、故ニ先王ノ以テ自カラ衛ル  
 所、守護ト後王ノ以テ自カラ累ラフ所、仇讎ト均シク  
 此ノ兵ナリ、用捨<sup>トク</sup>後王ハ此ノ兵ヲ用ヒ、何如シヲ顧リミ  
 ルノミ、降ツテ戰國ニ至リ、此ノ兵各々羣雄ニ分領セ  
 ラル、ト為ス、日ニ淬<sup>ニ</sup>ギ月ニ厲<sup>ト</sup>ギ、淬<sup>ト</sup>水ニ入レ、以テ金  
 燒

質<sup>ヲ</sup>動クスル也、厲<sup>ハ</sup>磨石ナリ、言フ逾イヨ用ヒテ逾  
 ハ兵ヲ練ルル益マス、熟スルナリ、言フ逾イヨ用ヒテ逾  
 イヨ勁<sup>シ</sup>、而シテ其撫摩練治シ、之ヲ教テ後ヲ戰フ者  
 ハ、武田上杉ニ過グル莫シ、故ニ我ガ邦兵ノ精キハ此  
 時ニ極マル、而シテ二家ハマタ精ノ精ナルヒノナリ、  
 且ツ源平以還其兵ミナ散ジテ自戰<sup>ス</sup>、將ノ勇、卒ノ銳  
 ナル者ハ勝ツ必ラズ、東佐結陣、坐作進退ノ法アルニ  
 非ズ、之レ有ルハ二家ニ始マル、二家ノ兵法、傳テ我邦  
 ノ極則ト為ス者ハ、此ニ撫摩<sup>由</sup>テ爾<sup>リ</sup>、然レモ源氏、足  
 利氏ハ、毎<sup>ニ</sup>東國ヨリ起リ、其兵騎戰ニ習人、而シテ足  
 利氏ハ京畿ニ居テ馬政ヲ恤レマズ、言フハ意ヲ騎戰  
 利氏ハ京畿ニ居テ馬政ヲ恤レマズ、言フハ意ヲ騎戰



ニ居リ、長槍ノ歩卒之ニ次ギ、騎士之ニ次グ、牙旗鼓螺中ニ居リ、左右左翼拒テ之ヲ夾サム、輜重後ニ居リ、游兵外ニ居ル、戦フ毎ニ弓銃ヲ交発シ、長槍之ニ從ス、士ハ馬ヲ下ツテ以テ進ミ、或ヒハ卒傍ヨリ出デ、或ヒハ中ヨリ跳盪シテ出ヅ、戦ヒ酣ニシテ或ヒハ麾下ヲ以テ之ニ乘ズ、變化準ナシト雖モ、槩ネ此ヲ以テ常ト為ス、一時並ビニ此法ヲ同フス、而シテ羣雄環視シテ獨リ二家ヲ畏ル、其噬搏解ケザルヲ環視スルガ如ク、人デ解ケザルニ喩フヲ幸ヒトシテ、敢テ觸レ犯サズト云フ、夫ノ孫武齊人仕フ吳起ノ魏人ナリ、魯魏楚世ヲ

織田豊臣徳川並ニ侯甸王畿ニ起リ、騎少ナク歩多シ、即チ二家田上杉武ノ如ク、較騎多シト雖モ、亦其國險ニシテ騎ニ便ナラザルヲ以テス、騎ハ率ネ大數徒遠キラ致スニ取ル、戦フニ至テハ、既ネ馬ヲ舍テ、歩闘ス、故ニ騎戦遂ニ廢ス、又火器ト長槍ト便長槍皆用テ、以テ軍鋒ト為ス、而シテ弓矢ノ用稍ヤク衰ノ是又我が邦ノ兵體變遷ス、知ラズンバアル可ラザル也、此ノ時兵農別ルト雖モ、往々魚獵ノ者ヲ収メテ弓銃手ト為シ、盜賊ヲ収メテ間諜ト為シ、以テ隊伍ヲ補ヒ斥侯ニ充ツ、二家皆是レナリ、二家ノ陣大約弓銃手前



同シテ生ゼズ、武ニスト起ト世ヲ異饒ヒ世ヲ同フシテ生  
 ゼンムルモ、人ノ兵ヲ借リテ以テ已ガ法ヲ施ス、大ニ  
 其カヲ展ベ、カクドウ確闘シテ勝敗ヲ決スル能ハザルナリ、今  
 ニ公謙信孫吳ノ能ヲ挾サシ、イヒモツ并有シテ以テ趙魏ノ戦國  
 ノニ強ノ甲ヲ擅カシヒリマ、ニシテ、一時比肩接踵ニ公幸イ  
 出テマ、武技ヲ相セシハ、ヨミレナク希世ノ遇ト謂フ可シ、後ノ兵  
 ヲ言フ者、二公相與ニスルノ跡ヲ觀テ、其形勢機權クニ國  
 ヲ形勢、兵ヲ用ノ大ナルヲ識リ、然ル後チ之ヲ其書ニ  
 參シ、マカシ真偽ヲ辨別セバ、其法得テ詳論ス可シ、余是ヲ以  
 テ二家ヲ合叙ス、昔者吾ガ父嘗ツテ行テ甲斐ヲ過グ、

甲斐ノ民、飲食スル毎ニ必ラズ、タケノコ館君ノ称ス、館君ハ信  
 玄ナリ、信玄ノ悖逆ノ父信虎ヲ逐シ以テシテ能ク強敵  
 ニ抗リ敵ナスル一數十年、而シテ相下ラズ、謙信ニ下ラ  
 豈其民ヲ教ユルニ素チ俗ヲ重ニジ死ヲ輕ンズル、我が  
 鍊治イカサアルヲ以テスルニ非ラザランヤ、謙信ノ事  
 世ニ傳ハラザル所多シ、余畠山氏、宇佐美氏ノ説ヲ并  
 考シ、又米澤ノ人士ト交游ス、余ノ為メニ言フ、此ノ  
 如シ

特  
 2647



